Mal を用いた名詞の量化表現

出　島　恒太郎

［**キーワード**：①ドイツ語学　②助数詞　③量化　④タイプ・シフト
⑤時間表現］

1. 序論

ドイツ語の Mal/mal（‘time’）には、ある出来事を時間軸上に位置づける「時間副詞」用法（ein（mal）の形式で）（1a)、ある出来事が繰り返し生起することを表す「頻度副詞」用法（-mal/ 数詞＋Mal の形式で）（1b)、「心態詞」用法などが広く知られている（(ein）mal の形式で）（1c)（cf. 筒井 2009)。

（1）　a. Einmal kam eine 38-jährige Frau aus Wien zu mir.（＝128a)（筒井 2009: 118）
「ある時 38 才のウィーン出身の女性が私のところへ来た」
（MK.55, St. Galler Tagblatt, 03. 01. 2001）
b. Ich habe ihn nur EINmal gesehen.（ベルガー 他 1990: 6）
「私は彼を一度だけ見たことがある」

c. Kannst du mal das Fenster aufmachen?（Werner 1998: 152）
「（君は）ちょっと窓を開けてくれる」

本稿はすでに先行研究で扱われている上記の用法に新たに加える形で、出島（2022）において論じられた「出来事名詞における量化」に限らない、Mal/mal による名詞の量化表現の更なる種類を扱う（2a）。Gold は一般に物質不可算名詞（substance mass noun）と考えられる。そして本稿は当該量化表現を、**助数詞構文**（Numerativkonstruktion）がその動機づけとなり、（2a）のタイプ・シフトを可能にしていると想定する（2bc）。この似通った名詞句構造を有しているように見える、助数詞構文に関して提案されているいくつかの基準に基づいてこの仮説を検証する。

（2） a. Zweimal / Zwei Mal Gold
b. eine Tasse Kaffee
c.［Numerale＋Numerativ＋Bezugsnomen］

1.1　本稿の構成

本稿はこの Mal/mal の名詞量化表現を分析するために以下の順に論を展開していく。第 2 章では先行研究を振り返っていく。2.1 節でまず、参照文法における Mal/mal の用法の概略を紹介するとともに、Mal/mal に存在する中心的な概念とその広がりを理解していく。2.2 節では Mal/mal の名詞量化用法の存在をすでに指摘している先行研究で行われた観察および分析方法を振り返る。最後に、本稿の研究対象と類似した形式を有していると見られる、ドイツ語の不可算名詞を数える為の助数詞構文という形式に関する先行研究を紹介する（2.3）。第 3 章ではコーパスから収集した言語現象の用例を観察し、分析、分類を行う。まず、対象となる用例を紹介し、

それから助数詞構文の形式を Mal/mal の名詞量化表現が実際に有しているのかを検証する。第 4 章では、Mal/mal と共起する名詞に関しての考察をする。第 5 章でまとめを行う。

2. 先行研究

2.1 参照文法における Mal/mal の概略

参照文法における記述で、Mal/mal の名詞量化用法を紹介したものはない[1)]。しかし副詞規定の Mal/mal に関する記述には様々なものがある。以下これを紹介していく。

Engel（1988）は時制副詞（Temporale Adverbien）を形成する接辞の一種として、-mal を記述している。

> *-mal*
>
> tritt an quantifikative Adjektive sowie an das Determinativ *manch* und bildet aus ihnen Temporaladverbien, meist mit Wiederholungscharakter, oder Vervielfältigungszahlen:
>
> zweimal, manchmal, tausendmal usw.（Engel 1988: 756）
>
> -mal は量化形用詞および限定詞 manch に接して現れそしてそれらから、大抵反復の性質を伴う、時間副詞を、または倍数化する数を形成する：
>
> zweimal, manchmal, tausendmal など。（訳筆者）

量化形容詞（quantifikative Adjektive）とはここで、一般的に言う所の数詞を含んでいる。一方で Weinrich（2003）は -mal を基数詞（Kardinalia）の体系における派生であると考えている。

Das Paradigma der Kardinalzahlen kennt eine Reihe von Nebenformen, die durch Ableitung（Derivation）gebildet sind und im Prinzip das ganze Paradigma umfassen.［…］Es sind insbesondere die folgenden:
Iterative Kardinal-Adverbien mit dem Suffix -*mal*（Beispiele: einmal, zweimal, dreimal, zwanzigmal, hundertmal）
Iterative Kardinal-Adjektive, gebildet mit dem Doppelsuffix -*malig*（Beispiele: die zweimalige Wiederholung,
ein dreimaliges Wunder）（Weinrich 2003: 454）
基数詞のパラダイムは一連の副次的形式を有しており、この副次的形式は派生によって形成され、そして原則としてはパラダイム全体を包括している。［…］特に以下のものである：
接尾辞 -mal を伴う反復基数副詞規定（例：einmal, zweimal, dreimal, zwanzigmal, hundertmal）
二重接尾辞 -malig を伴い形成される反復基数形容詞（例：二度の繰り返し（die zweimalige Wiederholung）、三度の奇跡（ein dreimaliges Wunder））（訳筆者）

Engel（1988）と Weinrich（2003）は共に mal を接辞と考えている。しかし Weinrich（2003）は -mal を数詞（体系）からの派生であると考えている点で異なる。数詞体系における副次的形式（Nebenform）であると考えるということ[2)] と、語形成において mal にどの程度の意味を認めるのかということは関連しているであろう。Weinrich は数詞に中心的位置づけを行っているため、Mal/mal からの派生と考えていないようである。Mal/mal の量化について考えるためには、形態論的な派生における語基（base）が深く関係する。派生元に関しては、しかしながら、Mal/mal に時間副詞用法が存在すること、また Mal には名詞としての用法もあること

を考慮し、その多義関係を考えれば、Mal/mal 自体の意味を無視して記述することは許されないのではないか。数詞の副詞形を作るためだけの操作としての Mal/mal は適切なのであろうか。本稿は einmal, zweimal などは **Mal/mal が語基または主要部**であると考える。また、別の観点で接辞化という認識には議論がありうる。それは正書法という観点だ。einmal, zweimal などはその綴りから一つの語彙項目をなしていると見なされている。この考えが反映された結果 ein Mal, zwei Mal と分かち書きをしないということが規範的に選択されうると考えられる。従って、綴りとその語彙化の関係が問われなければならない。しかしながら einmal などの「一」を伴う語（句）はさておき、zweimal などはそもそも一つの語彙項目と見なされるべきなのだろうか。例えば時間副詞の einmal と頻度副詞の einmal（EINmal）はアクセントの有無で区別することができる（cf. 筒井 2009）。もっとも Mal は beide Male の様に複数形になることもある。従って本稿においては、zweimal と zwei Mal の間に意味の違いを認めないこととする[3)]。

次に、すでに述べたように、Mal/mal の語自体の意味を重視するという立場を取るため、名詞としての Mal の辞書記述を Duden から引こう。

> durch eine bestimmte Angabe oder Reihenfolge gekennzeichneter **Zeitpunkt** eines sich wiederholenden oder als wiederholbar geltenden Geschehens[4)]
> 特定の表示によってまたは順序によって特徴づけられた、繰り返されるまたは繰り返すことが可能であるとされている出来事の**時点**（強調・訳筆者）

Mal は「時点」を表す語であることが分かる。また名詞の Mal は単数形と複数形を有している。これまでの例文で明らかなように、（副詞用法の）

分かち書きを行わない場合、複数語尾は消失している。Zwei Mal のように分かち書きするような場合においても複数の語尾はほとんど消失しきっている[5)]。

以上のように参照文法において Mal/mal は、数詞体系からの派生と考える、すなわち量化形容詞に対応する反復基数副詞（(Iterative Kardinal-）Adverbien）など、Mal/mal 自体の意味を前提にした記述ではない。そしてこれらの記述は副詞規定用法が中心に据えられており、これは文または動詞句を時間軸に位置づけるまたは量化するものである。一方で Mal/mal の様に「時間」を意味する形態素によって、動詞領域の量化を行うのは通言語的に確認できる（cf. Gil 1993; Moreno Cabrera 1998; Corbett 2000; Corbett 2001; Gil 2001）。この Mal の語彙的な意味を考慮することで、言語分析および比較が可能になると考えるのが本稿の立場となる。

2.2　Mal による名詞の量化表現

Mal による存在物の量化表現が指摘されたのは、萌芽的な研究を含めると、次の三者の研究においてである：Krifka（1989）；池上（2000）；筒井（2009）。以下 3 者の研究についてその分析と考察方法を振り返っていく。

2.2.1　Krifka（1989）

Krifka は drei Mal などを Zähladverbial（数え副詞規定）と呼称している[6)]（cf. Krifka 1989: 180）。そして AOR 関数を用いて定式化を試みている。「AOR 関数の定義にはただし、ここで開発されたものより豊かなモデル構造が必要となる」（Krifka 1989: 179）と述べているように、一時的な説明を行っているといえる。AOR 関数の理解に重要なのはここで、「局所的に最大の出来事（lokal maximales Ereignis）」（Krifka 1989: 179）という概念である。これは概略、出来事の開始と終結全体を含む出来事のことを

指す。以下はその解釈である。

> Der Ausdruck *drei Mal zwei Bücher lesen* trifft danach zu auf alle Ereignisse, die aus drei sich nicht überlappenden Ereignissen bestehen, die unter *zwei Bücher lesen* fallen.（Krifka 1989: 181）
> drei Mal zwei Bücher lesen の表現はこれに依れば、zwei Bücher lesen のもとに入る、三つの互いに重ならない出来事から成り立つ、あらゆる出来事にあたる。（訳筆者）

Mal/mal に関するこの理解の下、Krifka（1989:19）は、以下のような助数詞句（Numerativphrase）の繰り返しと見なしている現象を取り上げている。しかしながら、そこで踏み込んだ分析は行われていない。もっともこれは名詞句を量化した Mal/mal として意図された例示ではない可能性もある。zwei Mal は**後続する drei にのみ**かかっており、（4a）のような統語関係になっているものとも考えられる。

（3） zwei Mal drei Barren Gold[7)]（≠Zähladverbial）（Krifka 1989: 19）
two time three bars gold

（4） a.［［［［zwei Mal drei］Barren］Gold］］
b.［［zwei Mal］［［drei Barren］Gold］］

これは岡本（2022）が扱った基数倍数表現に相当する現象であると考えられる。実際にこのような用例はコーパスに多く見られ、その際 mal は × の記号で表記する場合もよく観察される。従ってこのように Mal/mal にさらに数詞（drei など）が連続するようなケースは考察の対象外とする。

（5） Bei den Entscheidungen über die **4 mal 400-Meter** sowohl der weiblichen wie der männlichen Jugend dominierten die Läufer der LG Nike Berlin, in deren Reihen auch Sportler aus Hellersdorf und Marzahn stehen.

Berliner Zeitung, 01.07.1997［DWDS］

（6） In der abschließenden **4×400-Meter-Staffel** erlitt der führende amerikanische Schlußläufer eine Muskelzerrung, sein Ausfall bescherte der DDR-Männermannschaft noch den Gesamtsieg.

Die Zeit, 16.09.1977, Nr. 38［DWDS］

しかし Krifka は 例（3）に厳密な特徴づけを与えていないため、実際のところこの例が何を意図していたのかは定かではない。すなわち、（4b）のような統語構造を想定した名詞の量化表現である可能性もあるということだ。よって Krifka（1989）は Mal/mal による量化を暗示する先行研究である。

2.2.2 池上（2000）

池上（2000）は言語におけるモノとコトという対称関係とその相互的な関係について着目した。モノとは空間的な存在であり、コトとは時間的な存在である。池上（2000: 144）では、「〈モノ〉の〈個数〉を時間的な〈回数〉に読み替える」例として、ドイツ語の（7）と（8）の例が紹介されている。（7）と（8）は、客観的には同じ二枚の切手を意味するが、（7）は、「2 枚の 10 ペニヒ切手」、（8）は、「2 回の 10 ペニヒ切手」と表現されている。

（7） Zwei zehn Pfennig Briefmarken, bitte!

（8） Zweimal zehn Pfennig Briefmarke, bitte!（池上 2000: 144）

出来事を数えるための表現、zweimal によって存在物の個数を回数で読み替えている現象として扱われている。またこの言語現象の形態にも言及しており[8]、（8）の Briefmarke が単数形で現れることは、コト的に捉えられた結果「単複の区別が中和され」た形であるとしている（池上 2000: 149）。

2.2.3 筒井（2009）

筒井（2009）は心態詞の（ein）mal を中心に扱った研究であるが、（ein）mal の心態詞用法の確立に関しても考察を行っている。einmal の時間副詞、回数副詞そして心態詞の間にある統語・意味的関係から用法間の派生関係を明らかにしようと試みているため、時間副詞および回数副詞に関しても紙片を割いて考察を行っている。そこでは、池上（2000）が扱った（8）と同様の用法について触れている。しかし、回数副詞の（ein）mal にまつわる一用法であるとするにとどめ、さらに踏み込んだ分析は行っていない。一方、池上が mal の品詞に関する言及を行っていないのに対して、筒井（2009）は Mal/mal のこの用法を回数副詞であるという見解を示している。

2.3 Numerativkonstruktion

助数詞構文（Numerativkonstruktion）は「Numerale（数詞）＋Numerativ（助数詞）＋Bezugsnomen（関連名詞）」で構成されている言語現象に対する名称である[9]。この Numerativ という概念をドイツ語に最初に持ち込んだのは Krifka（1989）である（cf. IDS-Grammatik 1997）。これはもともと中国語文法の記述に用いられた概念である（cf. Yi 2021）。助数詞には

Krifka（1989）に依れば以下の 6 つの下位類がある。

（9）	a. zwei Liter Wein	b. zwei Schluck Wasser	**Messkonstruktion**
（10）	a. zwei Becher Milch	b. zwei Fässer Wein	**Behälterkonstruktion**
（11）	a. zwei Scheiben Brot	b. zwei Würfel Zucker	**Zählkonstruktion**
（12）	a. zwei Stück Vieh	b. zwei Kopf Salat	**Klassfikatorkonstruktion**
（13）	a. zwei Rudel Wölfe	b. zwei Herden Vieh	**Kollektivkonstruktion**
（14）	a. zwei Sorten Bier	b. zwei Arten Glück	**Sortenkonstruktion**

（Krifka 1989: 12）

Murelli（2017）は上記の下位分類に対する簡潔な説明行っている。

> **Messkonstruktionen** dienen dazu, eine messbare Quantität auszudrücken; **Behälterkonstruktionen** bezeichnen eine Quantität, die sich in einem Behälter befindet; **Zähl- und Klassifikatorkonstruktionen** dienen dazu, Teile eines Stoffes bzw. einer nicht-zählbaren Entität als Einheiten zu zählen; **Kollektivkonstruktionen** gruppieren einzelne Individuen zu Aggregaten; **Sortenkonstruktionen** bezeichnen einzelne Arten oder Sorten einer Entität.（Murelli 2017: 1702）
>
> **計測構文**は計測可能な量を表現することに用いられる；**容器構文**は、ある容器に入る量を示し；**数えと類別詞構文**は、物質または数えることのできない存在物の部分を単位として数えることに用いられる；**集合構文**は個々の個体を集積物へとグループ化する；**種類構文**はものの個々の種類または品種示す。（強調・訳筆者）

Krifka はこの下位分類を Jansen（1980）[10] および Löbel（1986）を参考に

行っているが、分類は多かれ少なかれ異なっている。

Krifka に強く反映されている Löbel（1986）の分類では、助数詞[11]を広範に収集し、リスト化を行い、Krifka と異なる分類を行った。しかしそのリスト中に、Mal/mal は含まれていない。これは Krifka（1989）においても同様である（Mal/mal は Zähladverbial としている）[12]。

助数詞構文は「数詞＋助数詞＋関連名詞」で構成される言語表現の総称である。この構造が冒頭で提示した（2a）のような例にも当てはめられる場合、どのような下位分類に当てはまるまたは当てはまらないのかを検証するのが第 4 章以降である。本章では引き続き、助数詞に相当する語にはどのような性質が認められるのかということをいくつかの先行研究に基づき確認していく。

2.3.1　助数詞構文の性質

Murelli（2017）は Krifka（1989; 1991）にならい、助数詞構文の下位分類を採用しつつ、下位類への具体例の割り当てなど、方法論は Löbel（1986）から多くを参考にしている。助数詞は、形態論的特徴としての数の表示に関して特異な振る舞いを見せる：先行する数詞が 2 以上の場合であっても、助数詞は複数形にならない場合がある。以下は Murelli（2017: 1721）を参照している。

（Ｉ）形態論的基準（数の表示）

1　N1 は a. **計測構文**および **Dutzend** などの数単位において基本的に単数形である。

b. **類別詞構文**においては 1 より大きい数詞においても単数形が比重を占める。

c. **種類構文**では複数形になる。

d. 他の下位タイプでは、特定の助数詞名詞に対して語彙に依存して、多かれ少なかれ、普通は単数形になる（特に Blatt、Bund、Laib、Schluck に対して当てはまり、一方で Glas、Sack または Fass においては両方の数がいくらか均等に表れる）[13]。

格標識にも助数詞構文においては特徴的な振る舞いがある。N1 は少ない例外を除き、文法規則に規範的に従う。それに対し N2 には複雑な規則が存在している。これは形容詞が N2 に付加された場合により顕著になる。しかし基本的に N2（NOM2＝Nominalphrase 2）は主格で現れる。

（Ⅰ）形態論的基準（格の表示）

2. a. N1 は少ない例外を除き、規則的に振舞う。

b. N2 が単数形でかつ付随要素がない場合、あらゆる格において無標の主格になる。

c. N2 が複数形でかつ付随要素がない場合、無標の格、主格になる。

―与格においてこの形式は -n で終わる複数与格形と交代する。

（Murelli 2017: 1724）

ドイツ語の助教詞構文は統語的に 3 種類の形式を区別する：1. 同格；並置構文（Apposition; Juxtaposition）、2. 前置詞修飾、3. 属格修飾。しかしながら、本稿はそのうち、1. 同格構文のみを対象とする。理由としては、Mal/mal がその他二つの形式で出現しないためである。よって統語的基準は下記の一つになる。

（Ⅱ）統語論的基準

3. 同格構文である。

最後に以下は Murelli の述べる助数詞（＝N1）および関連名詞（＝N2）の意味的特徴をまとめたものである（Murelli 2017: 1706–1708）。

（Ⅲ）意味的基準[14)]

4. N1 は基数詞や量化子と組み合わせることができる：可算でありかつ個体である[15)]。
5. N1 は、計測、容器、数え構文において、分割可能である。
6. N1 は相対的である：N2 により規定される。
7. N1 は慣習化されているが、文脈にも強く依存する。
8. N1 は任意の N2 と組み合わせられない。
9. N2 は個体名詞（複数）または連続体名詞である。
10. N2 は構文の意味的プロフィールを規定する。
11. N2 は、文脈から補える場合を除いて、省略不可能。

以上 Murelli（2017）によってまとめて提示された基準を用いて、分析を行っていく。

3. 現象の分析と分類

Mal/mal による名詞の量化用法は決して用例の多い言語現象ではなく、Mal/mal の用法の内において中心的な位置を占めているとは言えない。その一方で、この形式は口語的に用いられるだけでなく、新聞などにおいても用例が実際に確認される。

まず、本章で行う分析において対象とする用例を紹介する。用例を、特に関連名詞を簡易的に分類するため、その手立てとして Zifonun（2017b）の名詞の分類を導入しておく。以下の分類表は、存在論的次元（具体と抽

象）と概念―言語の次元（個体名詞と連続体名詞）によって区別を行っている。個体名詞と連続体名詞の対立は、一般的にいう可算と不可算の対立に対応している。

名詞分類表

存在論＼概念―言語		個体名詞		連続体名詞	
			集合名詞		
具体的対象	物	Mensch, Haus	Familie	Polizei	Reis, Brot
	物質				Metall
抽象的対象		Vorteil, Sprung, Staat		Hitze, Schlaf, Liebe	
		Hoffnung, Raum, Musik, Schönheit			

Zifonun（2017b: 413）（一部抜粋）

以下、前章で見た助数詞構文と同じ特徴を「数詞＋Mal/mal＋名詞」が有しているのかを検証する。

3.1　数詞＋Mal/mal＋関連名詞の構造について

3.1.1　Mal/mal は助数詞か？―形態・統語・意味的特徴―

統語的特徴に関しては、N1 と N2 が並列構造にあるものを収集した。後続名詞が属格でなく、前置詞を伴うものでもないということからそのように判断することができる。またすでに述べたように「数詞＋Mal/mal＋関連名詞」の構造において、N2 が並列構造以外（修飾構造）で出現する用例は見られなかった。

次に形態的特徴に関して観察していく。まず、序論でも述べた副詞用法と同様に、Mal/mal には複数語尾が表示されないということが指摘される。dreimal など一語でつづられた場合は当然として、Mal と大文字でつづら

れた場合もほとんどの場合、複数語尾は落ちる。これは典型的な助数詞の特徴である。

（15） Bei uns gibt es Heiligabend für Tom zwar **zwei Mal Bescherung**, aber keine Party:

Der Tagesspiegel, 05.01.2004［DWDS］

（16） Lieber **fünf Mal Flug** und wichtige Termine verpasst als einmal ein Attentat riskiert.

Der Tagesspiegel, 03.01.2004［DWDS］

また格の表示も一語でつづられた場合には当然表示がないが、分かち書きで綴られた時、数詞が 1 または不定冠詞に、多くの場合、格の語尾が表示される。

（17） Wenn man nach **einem Mal Training** so ein Debüt abliefere, dann zeige das, sagte Berlins Trainer Emir Mutapcic nach dem gewonnenen Spiel, “dass er nicht nur ein kompletter Spieler, sondern auch eine Persönlichkeit ist”.

Der Tagesspiegel, 03.03.2003［DWDS］

（18） Bei **einem Mal Haarschneiden** haben wir den Preis für den Familienpass（5 Euro）schon raus.

Der Tagesspiegel, 27.01.2002［DWDS］

しかし分かち書きで綴られた場合でも格の表示がない場合も少数ある。しかし数詞または不定冠詞に格が表示されない場合というのは、Gold や Silber（メダルの枚数を表す場合）などの特定の例に偏りを見せているよう

である。

（19） Elf Wochen nach den schwachen Leistungen bei den Weltmeisterschaften von Melbourne mit nur einem dritten Platz sieht die Bilanz in Athen mit **ein Mal Gold** und drei Mal Bronze wesentlich besser aus.

Der Tagesspiegel, 26.08.2004［DWDS］

N1 の Mal/mal は Murelli（2017）によってまとめられた意味の基準にほとんど当てはまるように見える。しかし、完全に当てはまるとは言えない箇所も存在する。8. の基準が示す任意性に関する制限は議論があり得る。N2 によって Mal/mal が選択されているかどうかは、以下に見るように、N2 に出現する名詞の多様性（抽象名詞から具体名詞と幅広く存在している）からは特に疑問である。このことから Mal/mal が任意の N2 を選択していないのか、Mal/mal の構文に複数の助数詞の下位タイプが割り当てられるのか、この二通りが考えられる[16]。後者は例えば Stück などの助数詞に異なる下位類が複数あてはめられることからも可能な考え方である。ここではこの後者の考え方を採用し、Löbel（1986）や Murelli（2017）に基づき用法の分類を試み、その是非を検証したい。前者の考え方を採用した場合、すでにある助数詞の分類の枠組みそのものを見直さなければならなくなってしまうからである。続く節で、N2 の位置に現れる名詞の種類を特定し分類したのち、全体としての Mal/mal 構文の分類を行う。

3.1.2　関連名詞の形態・統語・意味的特徴に基づく分類

すでに指摘したように N2 には様々な種類が出現するため、これを分類する必要が出て来る。後続名詞の分類は基本的に意味に基づいて行うこと

になる。なぜならば、用例全体を見た時に形態・統語的特徴にバリエーションがあまり見られないからである。そのような意味では N2 も形態・統語的基準を満たしているということになる：N2 は裸名詞の形式で現れる。2.3 節で取り挙げた N2 の意味的性質を考慮して、実際の用例を観察していく。

まず、(20)–(21) は動詞 bewähren の -ung 接辞を伴う名詞化（単数）である。-ung 形は名詞化の程度およびそれに伴う語彙化が、動詞の中性名詞化よりも少なくとも進んでいる形態であると考えることができる[17)18)]。なぜならばこの -ung 名詞は、語にある程度依存するものの、数詞による直接修飾を許容するからである (20)。しかし (21) では、Mal/mal が用いられている。

(20) Für den dreimaligen Olympiasieger sind das **zwei von drei Bewährungen**, denn auch den America's Cup hat er mit einem Schweizer Syndikat ins Visier genommen.

Der Tagesspiegel, 19.07.1999［DWDS］

(21) <u>Nach **dreimal Bewährung**</u> kann das Gericht kein Auge mehr zudrücken.

Berliner Zeitung, 26.02.2005

続く例 (22)–(24) では、目的語と主語の位置で異なって用いられる Gelegenheit が、Mal/mal によって量化されている例である。N2 の Gelegenheit は可算名詞として用いることができるのにも関わらず、ここでは不可算である。ただしこれまでの例と異なり、Mal/mal と Gelegenheit が句を形成しているかの、確からしさが低くなっている。この不確かさは文または動詞句を作用域に有しているという余地を残す。しかしながら Gelegenheit と

Mal/mal の結びつきは特徴的であるということがコーパス検索からは示唆される[19]。

（22） In der neuen Spielzeit haben Sie noch **dreimal Gelegenheit**, dieses außergewöhnliche Werk zu erleben.

Berliner Zeitung, 27.06.2003［DWDS］

（23） “Der Kunde muss dem Händler **zweimal Gelegenheit** zur kostenlosen Nachbesserung geben”, erläutert Stroech.

Die Zeit, 03.05.2006, Nr. 18［DWDS］

（24） Dazu ist in den kommenden Tagen gleich **zweimal Gelegenheit**.

Berliner Zeitung, 05.06.1997［DWDS］

（22）–（24）までの例と比較して、Gelegenheit はそれ自体が行為を表す名詞ではない。しかし zu 不定詞句（22）や zu 前置詞句（23）は動詞がその内容を具体化している。従って時間的な内部構造を示す出来事名詞であるといえる。（24）は Gelegenheit が主語として用いられており、かつ Mal/mal に量化されている例である。この例は、Mal/mal＋Gelegenheit が主語に立つ場合、動詞の数は単数形での一致することを示す。従って主要部は、統語的にも意味的にも Gelegenheit である。

（25）においては Urlaub が、（26）では Weltkrieg が前置詞句内で N2 の位置に現れている。この二つの名詞も前の例と同様に、可算名詞として無標の形で用いることができる。しかし、ここでは不可算名詞として用いられている。これら二つの例はさらにこれまでの例と異なり、動作名詞でもなく、動詞も伴わない出来事名詞である。休暇や戦争は単に期間を表すだけではなく、その時間幅において何らかの行為が行われているということが含意されている。よって動詞や動作を表す語よりは暗示的に出来事を意

味する語であると考えることができる。

（25） Ebenso konnte das Ehepaar Christel und Werner Hilscher aus Berlin für 15 Mal **Urlaub** geehrt werden.

Mittelbayerische, 03.09.2019［DWDS］

（26） Erst Bismarck machte sie dazu. 1871 bis 1945, nur 74 Jahre, waren Zeit genug für **zweimal Weltkrieg**, dreizehn Jahre Faschismus, millionenfachen Mord an Jüdinnen, Kommunistinnen, Sinti, Roma und Zwangsarbeiterinnen.

Die Zeit, 31.08.1990, Nr. 36［DWDS］

これまで見てきた用例は出来事と関わる語が N2 の位置に現れる用例であった。これらはいずれも抽象名詞と考えられる名詞であろう。しかし以降の例は、N2 の位置に現れる名詞の種類の多様さを示す。（27）では Gold および Silber が量化されている。これは明らかにメダルの枚数を表す表現である。数詞＋Mal/mal＋Gold/Silber/Bronze の形式でメダルの色（素材）の数を表す表現は新聞の記事などにおいて慣習的に用いられている。これに関連する表現に数詞＋Medaille でメダルの枚数を表す形式もある。Gold や Silber や Bronze は典型的には不可算名詞である。

（27） Die wurden mit **viermal Gold** und **dreimal Silber** erfolgreichster Teilbereich des Olympiateams.

Der Tagesspiegel, 30.08.2004［DWDS］

（28） Ich habe beim Hinfallen schon zwei Stöcke gebrochen”, sagte Zanardi, der in London neben den **zwei Goldmedaille** auch einmal Silber gewonnen hatte.

Die Zeit, 05.01.2013（online）［DWDS］

続く（29）の例も同様に Kaffee および Kuchen それ自体が典型的に出来事を意味する抽象名詞ではない（しかし、不可算であることが共通する）[20]。

（29） Im Preis von 152 Euro（EZ）sind neben zwei Übernachtungen mit Halbpension ein viergängiges Mittagessen und **zwei Mal Kaffee und Kuchen** enthalten.

Berliner Zeitung, 23.04.2005［DWDS］

これらは特に注文のフレームにおいて、“Zweimal Kaffee, bitte.” の形式で用いられる表現と同一のものと考えられる。しかし同時にこの表現は “Zweimal Bratwurst, bitte” のように典型的に個体名詞である Bratwurst をも量化の対象として取ることができる。これは書き言葉においても以下（30）のように用いられる。従って（30）では Wurst を個体として用いていないと考えられる。（31）は Bratwurst が個体名詞であることを示す例である。

（30） An einem Stand mitten auf dem Marktplatz bestellt Beata **viermal Wurst** und viermal Bier.

Kuckart, Judith: Lenas Liebe, Köln: DuMont Literatur und Kunst Verlag 2002, S. 287［DWDS］

（31） Ich erwog, **eine Bratwurst** zu **essen**, obwohl ich **Bratwürste** nicht **mag**.

Berliner Zeitung, 11.07.2005［DWDS］

以上見てきた用例は、助数詞構文の下位分類に則り分類を試みると次のように整理されると思われる：

Bezugsnomen（N2）		**N2** の例および例文番号	**Mal/mal** の分類
動名詞	出来事名詞	（21）Bewährung （22）–（24）Gelegenheit （25）Urlaub （26）Weltkrieg	数詞類別詞
具体名詞	物質不可算名詞	（27）Gold, Silber, Bronze	数え構文
		（29）Kuchen, Kaffee, （30）（Brat-）Wurst	計測詞

4. 考察

Mal/mal の助数詞構文の用法のうち、Mal/mal が数詞類別詞と同様の機能を果たしていると分類したグループには、N2 に動名詞および出来事名詞が現れる。これがなぜ数詞類別詞に分類されうるのかというと、数詞類別詞構文において数詞類別詞は N2 に新たな意味を加えるものではないからである。これは数詞類別詞に分類される Stück（例：zwei Stück Vieh）は、Löbel（1986）が「性質の割り当てを行わない」と特徴づけるように、また Krifka（1989a; 1989b）が「自然単位」であると考えるように、Vieh に新たな情報を付与する語ではないといえる。従って、動名詞および出来事名詞には、Mal/mal が意味する時間の単位という内容は既に含まれていると考えることができる[21)]。

Gold, Silber, Bronze と共に用いられる Mal/mal は数え構文に割り当てられるだろう。Gold, Silber, Bronze は Mal/mal という時間を表す単位と共に数えられることで、「メダル」とその「獲得する」行為の間の結びつきが

表されていると考える。その結果メダルの獲得数を意味するようになったのであろう。従って、これに関連する 数詞＋Medaille でメダルの枚数を表す形式とは、「枚数」と「獲得数」という単位によって区別されうる[22)]。また Mal/mal は食べ物を指す物質不可算名詞を N2 にとる。ここで Mal/mal は不定の量を表す単位であると考えられる[23)]。そしてその量は客観的な量ではないので、Liter や Gramm などとは異なる。Mal/mal は従って N2 に依存する可変的な単位である。Kuchen, Kaffee,（Brat-）Wurst などの食べ物がそれぞれ時間幅という単位に置かれることで、それぞれの一度分の食事の量を意味することになる。よってここでは計測詞の一種であると考えられる。

5. 結論

これまでの議論から、Mal/mal による名詞の量化は助数詞構文の形式を有しており、口語表現（注文のフレーム）や広告などの見出し（Überschrift）においてだけではなく、より幅広く存在することが明らかになった。もっとも、Mal/mal の一番典型的な量化対象は、動詞および文の表す出来事であり、副詞規定として文中の比較的自由な位置に出現することができる。しかし、文全体を含む動詞句以外にも、名詞を量化対象とすることをコーパスの用例は示し、名詞の種類も様々であることが分かる。いずれの名詞も、助数詞構文の特徴と一致し、不可算名詞（裸名詞）として現れる。そこには具体名詞だけではなく、抽象名詞も含まれることが用例から確認できる。このことは「助数詞構文における抽象名詞の量化」という領域の調査がまだ残っているといえる。Mal/mal の量化用法はこの「抽象名詞」の体系を明らかにすることで、その「抽象名詞」の体系の一部に「Mal/mal の量化用法」は関係づけることができると思われる。

参考文献

ベルガー，ディーター・橋本文夫・藤田五郎・佐伯禎明・鐵野善資（1990）『ドイツ文法・疑問の解明 ドゥーデン編集部の回答』三修社。

Corbett, Greville G.（2000）: *Number*. Cambridge University Press.

出島恒太郎（2022）「出来事名詞を量化する副詞規定 Mal/mal の分析：Gelegenheit を中心に」『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第 26 号 45〜71 ページ。

Engel, Ulrich（1988）: *Deutsche Grammatik*. Heidelberg: Julius Groos Verlag.

Gil, David（1993）: Nominal and verbal quantification. In: *STUF-Language Typology and Universals*. 46.1–4, S. 275–317.

Gil, David（2001）: Quantification. In: *Language Typology and Language Universals / Sprachtypologie und sprachliche Universalien / La typologie des langues et les universaux linguistiques*. 2. Halbband, De Gruyter Mouton. S. 1275–1294.

Helbig, Gerhard/ Buscha, Jochum（1972）: *Deutsche Grammatik: Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.

池上嘉彦（2000）『日本語論への招待』大修館書店。

Jansen, Louise M.（1980）: Probleme der Identifizierung und Klassifizierung von Quanten. In H.J. Eikmeyer & L.M. Jansen（hrsg.）*Objektargumente. Grundelemente der semantischen Struktur von Texten*. 3, S. 7–42.

Krifka, Manfred（1989）: *Nominalreferenz und Zeitkonstitution zur Semantik von Massentermen und Pluraltermen und Aspektklassen*. München: Wilhelm Fink Verlag.

Krifka, Manfred（2013）: Measuring and Counting in the Nominal and in the Verbal Domain. Handout. Workshop on Countability September 16–17, 2013. Heinrich-Heine Universität Düsseldorf.

Langacker, W. Ronald（1987）: Nouns and Verbs. In: *Language*. Bd.63（1）, Linguistic Society of America, S. 53–94.

Lee, Chungmin/ Kim, Young-Wha/ Yi, Byeong-uk（Hrsg.）（2021）: *Numeral classifier and classifier languages: Chinese, Japanese, and Korean*. New York: Routledge.

Löbel, Elisabeth（1986）: *Apposition und Komposition in der Quantifizierung: Syntaktische, semantische und morphologische Aspekte quantifizierender Nomina im Deutschen*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Moreno Cabrera, Juan Carlos（1998）: Adverbial quantification in the languages of Europe: theory and typology. In: van der Auwera, Johan（Hrsg.）*Adverbial constructions in the Languages of Europe*. Berlin / New York: Mouton de Gruyter, S. 147–

185.

Murelli, Adriano（2017）: Numerativkonstruktion. In Ludwig M. Eichinger/ Angelika Linke（Hrsg.）*Grammatik des Deutschen im Europäischen Vergleich: Das Nominal. Teilband 2: Nominalflexion, Nominale Syntagmen*. S. 1698–1734.

岡本順治（2022）「四則演算の自然言語表記：ドイツ語と日本語の場合」『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第 26 号、119〜134 ページ。

Rothstein, Susan（2021）: Count vs. mass nouns. In: Daniel Gutzmann et al.（Hrsg.）*The Wiley Blackwell Companion to Semantics*. Hoboken, N.J.: Wiley/Blackwell, S. 459–485.

筒井友弥（2009）『心態詞の意味と機能の研究―mal を中心に―』博士論文 広島大学。

Weinrich, Harald（2003）: *Textgrammatik der deutschen Sprache*. Georg Olms Verlag.

Werner, Angelika（1998）: *Deutsche Modalpartikeln im Kontrast zum Japanischen ー im Rahmen eines Wortartensystemvergleichs*. Siegen: Dissertation.

Yi, Byeong-uk（2021）: Numeral classifier and diversity of classifier systems. In: Chungmin Lee et al.（Hrsg.）*Numeral classifier and classifier languages: Chinese, Japanese, and Korean*. New York: Routledge, S. 6–39.

Zifonun, Gisela/ Hoffman, Ludger/ Strecker, Bruno（Hrsg.）（1997）［＝IdS-Grammatik］: *Grammatik der deutschen Sprache*. In 3 Bänden. Berlin: de Gruyter.

Zifonun, Gisela（2017a）: Nominale Quantifikation. In Ludwig M. Eichinger/ Angelika Linke（Hrsg.）*Grammatik des Deutschen im Europäischen Vergleich: Das Nominal. Teilband 1: Funktionale Domänen, Wort und Wortklassen*. S. 184–217.

Zifonun, Gisela（2017b）: Substantive. In Ludwig M. Eichinger/ Angelika Linke（Hrsg.）*Grammatik des Deutschen im Europäischen Vergleich: Das Nominal. Teilband 1: Funktionale Domänen, Wort und Wortklassen*. S. 406–515

注

1） IDS-Grammatik（1997: 1983）には助数詞構文「のような」形式で、抽象名詞が数量表現と共に用いられる例が紹介されている。

2） また Helbig/ Buscha（1972）および Weinrich（2003）において -malig という形式で反復を表す形容詞としての用法も同時に指摘していることは注目すべきだ。言語類型論的には、動詞領域における量化子が名詞句に現れることはほとんどなく、あっても例外的であると考えられているからである

（cf. Gil 1993）。英語の occasional などがその例外として挙げられているが、ドイツ語の -malig（ひいては Mal/mal も）ここに含めることができるであろう。

また、形容詞派生辞を伴う -malig による名詞の量化と、類似する機能を有する einfach, zweifach, dreifach などが形容詞化した用法を持っていることを比較すると、einmal の形式には一致が現れないことは興味深い。名詞の量化という点に関して -malig の形式と mal（＋N）の形式（池上 2000 による例）は一見その機能に関して重なり合っているようにも見えるが、これらは互いにどのような関係にあるのであろうか。

3） 筒井（2009）によれば zweimal と zwei Mal にそれぞれ副詞と数量詞というラベルが用いられている。

4） “Mal” auf Duden online. URL: https://www.duden.de/node/93000/revision/692760（アクセス日：2021 年 12 月 31 日）より。

5） 出島（2022）は beide Male や einige Male のような場合においては複数の語尾が現れることを指摘している。しかし、形式的な違いに基づく意味の違いなどについては言及していない。綴り上の違いに意味の違いがないとすると、単に規範の問題であるかもしれない。

6） ‘Zähl**adverb**’ ではないことに注意されたい。よって Krifka（1989）は数詞＋Mal を一つの語彙項目であるとみなしていない。

7） 原典 Krifka（1989）の例文（56）。

8） 他にも、用法制限や個人的体験にも広く言及している。

9） 助数詞構文は一般言語学的に “classifier construction” と呼称される言語現象とほぼ一致する。しかしながら Numerativ はその下位類に類別詞言語における類別詞を含んでいるため、その曖昧性の回避の為にも有用な概念であると思われる。

10） ここで詳細は省くが、Jansen（1980）は独自の分類を行っており、彼女の分類には “ZEIT quantifizierende Quanten” という分類がある。しかしここに Mal/mal は数え入れられていない。

11） Löbel（1986）では “quantifizierendes Nomen” という用語が用いられている。

12） しかしながら後に Krifka（2013）では、数詞＋Mal の用いられた言語表現に対して verbal classifier construction という呼称を用いている。この verbal classifier construction は助数詞構文における Klassifikator と関連することは明らかであるが、その詳細については機会を改めて論ずることとする。

13） Murelli は、複数の表示がある場合とない場合の違いを、Löbel（1986）の

“fakultativer Markierung des Plurals” という概念に基づき次のように説明する。
Diese gehe mit einem semantischen Unterschied einher: N1-Substantive werden, wenn sie nicht pluralmarkiert sind, als abstrakte Maßbezeichnungen（mit dem Merkmal［-Gegenstandscharakter］）aufgefasst; sind sie pluralmarkiert, so werden sie eher als konkrete Gegenstände aufgefasst.（Murelli 2017: 1722）
これは意味論的な違いを伴う：N1 名詞は、複数表示がない場合、（［―対象性］の特徴を伴う）抽象的な計測表示として理解され、複数表示がなされる場合、具体的な対象として理解される傾向がある。（訳筆者）

14） これ以外にも、次のような基準を紹介しているが、本稿の議論とは関わらない。
12. N1 は意味特徴によって階層化できる。
13. N1 は述語性スケール（Prädikativitätsskala）に配置することができる。

15） ここで個体と可算は区別された概念であると考えられている。個体でありかつ不可算である例として Sonne や Universum を挙げている（Murelli 2017: 1706）。

16）「類別詞」という用語の理解にはこのような分裂があるように思われる。すなわち類別詞は名詞の類別を行う語類なのか、はたまた名詞が類別された結果の付随要素としての語類なのかという二通りの理解である。前者の考え方は類別詞と任意の名詞との組み合わせを比較的に容認するような立場であり、後者は厳しい制限を設ける立場である。

17） 前置詞句内に不定詞名詞化された umsteigen が現れる例もある。ドイツ語においては動詞の表す動作はもちろん、不定詞名詞を基数詞で直接量化することもできないため、Mal/mal という語または形態素が必要となるため、挿入されていると考えることができる。不定詞名詞化は Zifonun（2017b）の分類表にも記載されていない、どちらかといえば動詞範疇に属する語であるといえよう。
（ｉ） ［…］es waren nicht viele, im Grunde nur noch eine einzige, mit **zweimal Umsteigen** in Soltau und Buxtehude.
Stadler, Arnold: Sehnsucht, Köln: DuMont Literatur und Kunst Verlag 2002, S. 277

18） 類似する例は英語においても観察されるため、特にドイツ語に特有の現象ではない。
（ii） two times of jumping/ *jump
共に跳躍を意味する名詞である英語の jump と jumping の意味の違いは Langacker（1987）で説明されている。

19） Gelegenheit の Mal/mal による量化についての議論は、出島（2022）を参照。

20） しかしこの等位接続された Kaffee と Kuchen は分散（distributive）の読みしかない。一方で（ⅲ）には絶対的な読みも可能であると思われる。
（ⅲ）zwei Stück Rindvieh und Jungvieh.

21） 残る不定詞名詞の扱いは、非常にあいまいなものになる。なぜならば複数の範疇が重なり合っているからだ。mit zweimal Umsteigen のように前置詞が Umsteigen を支配しているため、Umsteigen は名詞（不定詞名詞化）と考えるしかないが、名詞に副詞規定の Mal/mal を付加することは不可能である。従って Umsteigen は動詞不定詞であると考えることもできてしまう。よってここでは日本語の名詞出来事類別詞（「3 回の旅行」）のような範疇を新たに考えるか（Kobuchi-Philip 2021 を参照）、以上述べたように曖昧なものとして捉えるかの二通りが考えられるのではないか。しかし同時にこのような曖昧なケースというのが、動名詞および出来事名詞を数量詞構文で量化することと連続的に結びついていることも示している様にも思われる。

22） 一方で、Gold, Silber, Bronze と Mal/mal は明らかに、その出現頻度から、結びつきが固定化していると見られる。この固定化は類別詞の持つ性質であるとも考えられる。

23） 同種の表現に、Schluck, Schlag, Schuss などが挙げられると考える。これらはみなある動作が基になった〈助数詞（計測詞）〉で、不定の量を意味する。zwei Schluck Wasser などにおいても、水を含む口の大きさ自体は初めの一回目と二回目で同じだが、実際に口に含んだ水の量はそれに対して異なってもよい（口に 80% でもよい）。

Quantifizierung der Nomina mit *Mal*

DEJIMA, Kotaro

Das Wort *Mal/mal* hot im Deutschen einige Haupverwendungsbereiche: Es wird als “Zeitadverbial” benutzt（in Form von（*ein*）*mal*）, das ein Ereignis auf die Zeitachse legt（1a）, als “Frequenzadverbial”, das ausdrückt, dass ein Ereignis sich wiederholt（in Form von *-mal* / Numerale + *Mal*）（1b）und als “Modalpartikel”（in Form von（ein）mal）（1c）（vgl. Tsutsui 2009）.

（1） a. Einmal kam eine 38-jährige Frau aus Wien zu mir.（＝128a）（Tsutsui 2009: 118）

（MK.55, St. Galler Tagblatt, 03. 01. 2001）

b. Ich habe ihn nur EINmal gesehen.（Belger et al. 1990: 6）

c. Kannst du mal das Fenster aufmachen?（Werner 1998: 152）

In diesem Beitrag werde ich zusätzlich zu den genannten Verwendungen eine neue benennen, die mit *Mal/mal* Nomina quantifizierziert（2a）. *Gold* wird normalerweise als Substanznomen angesehen. Ich behaupte, dass die Numerativkonstruktion（2b, c）diesen sprachlichen Ausdruck motiviert und ermöglicht. Ob diese Hypothese angemessen ist, wird basierend auf einigen vorgeschlagenen Kriterien für Numerativkonstruktionen geprüft.

（2） a. Zweimal / Zwei Mal Gold

b. eine Tasse Kaffee

c. ［Numerale＋Numerativ＋Bezugsnomen］

Durch die Diskussion wird gezeigt, dass *Mal/mal* eine Form der Numerativkonstruktionen besitzt. Allerdings ist das typischste Quantifizierungsobjekt von *Mal/mal* jedoch der Satz oder die Verbalphrase, in dem bzw. in der ein Ereignis dargestellt wird, und *Mal/mal* darf als Adverb an

einer relativ freien Position im Satz erscheinen. Die Korpusbelege zeigen jedoch, dass *Mal/mal* auch Nomina quantifiziert. ES ist ersichtlich, dass es verschiedene Arten von Nomina gibt. Alle Nomina erscheinen als unzählbare Nomina und erfüllen die meisten Kriterien der Numerativkonstruktion. In den Beispielen gibt es sowohl Konkreta, als auch Abstrakta. Diese Tatsache, dass *Mal/mal* beide, Konkreta und Abstrakta, als Quantifizierungsgegenstände nimmt, zeigt, dass es in den Domänen der abstrakten Nomina in Bezug auf Numerativkonstruktion noch weiter untersucht werden soll.

（ドイツ語ドイツ文学専攻　博士後期課程 1 年）